



TITLE:

清末の寧波商人について(下):「浙江財閥」の成立に関する一考察

AUTHOR(S):

西里, 喜行

CITATION:

西里, 喜行. 清末の寧波商人について(下):「浙江財閥」の成立に関する一考察. 東洋史研究 1967, 26(2): 201-219

ISSUE DATE:

1967-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152745>

RIGHT:

清末の寧波商人について (下)

——「浙江財閥」の成立に關する一考察——

西里喜行

目次

まえがき

一 寧波商人の據頭

二 活動地域と營業種目

三 錢莊經營による資本蓄積(以上前號)

四 買辦活動による資本蓄積

五 寧波幫と上海商務總會

結びにかえて

四 買辦活動による資本蓄積

廣東貿易時代の公行制度の下において、外國商人と中國商人との取引を仲介する獨占的地位を占めたものは行商(普通十三行商)であり、行商の保證・監督にもとづき通譯及び通關事務を擔當するものは通事といわれ、通事の保證・監督にもとづき廣東滯留の外國商人に對して薪水・食糧その他の日常必需品を供給する仕事を擔當するものを、中國側では買辦と稱し、外國商人の方では「Compradore」と名づけた。⁽¹²³⁾ところが、アヘン戦争の一つの結果として公行制度が廢止される

に及び、中・外貿易における行商の獨占的地位の排除とともに從來の行商・通事の機能は買辦の機能の中に包括され、ここに半殖民地中國の象徵たるいわゆる買辦制度が成立するに至った。⁽¹²⁴⁾

いま、先學諸氏の明らかにしたところに従つて、買辦制度の内容及びその特徴を要約すれば、次の如くであろう。①買辦の職能は外國商人に代つて輸入商品を販賣し輸出商品を收買すること、外國商人のために中國商人の信用及び市場の調査を行ない報告すること、通關事務を處理すること、等々廣範にわたる。②買辦は外國商人に對して「命令服從、競業禁止、祕密嚴守、忠勤奉仕」を義務づけられ、萬一職務上の過失によつて外國商人に「損害」を與えた場合には賠償の責任を負わねばならないのみならず、外國商人側の一方的意志によつて、「何時にても解任」されうる。③買辦の収入は月額百兩から二百五十兩程度の俸給の外、買賣取引を仲介する場合に、自己の「雇庸主」たる外國商人と取引相手たる中國商人の雙方から取得する商品價格の一乃至二%の手數料を含むが、この手數料こそは買辦の資本蓄積の源泉であつた。

かくて、開港以來上海租界における「一種特別の職業」⁽¹²⁵⁾となつた買辦の地位が「新しい出世の途」⁽¹²⁷⁾と看做されるに至るや、一獲千金を夢みて外人商社の買辦たらんとする者は、陸續として上海へ押し寄せた。一八五〇—六〇年代の「洋務運動」の提唱者たる馮桂芬は、上海において通事即ち買辦たらんと志している人々を二種類に分け、「一爲無業商賈。凡市井中。游閒踴弛。不齒鄉里。無復轉移執事之路者。以學習通事爲遁逃藪。一爲義學生徒。英法兩國。設立義學。廣招貧苦童穉。與以衣食。而教督之。市兒村豎。流品甚雜。不特易於沾染洋淫習氣。且多傳習天主教。更出無業商賈之下」⁽¹²⁸⁾と指摘している。外國商人は對中國貿易における不利な條件を克服するために、換言すれば中國侵略をより容易に押しすすめるために、いわゆる「無業の商賈」を買辦に採用したのみならず、自からも積極的に「義學を設立」し、買辦の養成・訓練に當つたわけである。かかる「無業の商賈」にせよ、「義學の生徒」にせよ、彼等はい度買辦に「採用」されるや、惟だ「狐が虎の威を假る」如く、「洋人の勢力を藉り」⁽¹²⁹⁾「平民を欺壓し、官長を蔑視」し、ひたすら自己の資本蓄積にのみ専念して、その他のことを一切顧みない徒輩であつた。

ところで、この種の「郷里に齒せざる」人々の郷里（出身地）は主としてどこであったか。再び馮桂芬によれば、「上海通事。人數甚多。獲利甚厚。遂於士農工商之外。別成一業。廣州・寧波人居多。」⁽¹³¹⁾という。既に一八五〇—六〇年代において、上海の通事即ち買辦は「遂に士農工商の外に別に一業を形成」するほどに増大したわけであるが、なかでも廣州出身者と寧波出身者が多數を占めたというのは、いかなる理由にもとづくのであろうか。まず、廣州出身者が上海へ進出して買辦活動を展開するようになった背景は、次の如く説明される。⁽¹³²⁾周知のように、既に一八五五年頃の上海には、イギリス租界内の黃浦江に沿ったバンドに面して怡和洋行 (Jardine, Matheson & Co.)、沙遜洋行 (Sassoon & Co.)、仁記洋行 (Gill Livingston & Co.)、寶順洋行 (Dent & Co.) などの外人商社が軒を並べていた。これらの外人商社はいずれも廣東貿易時代には廣州で活動していたものであったので、その當時から密接な關係のあった廣州人は、これらの商社とともに早くから上海へ進出し買辦活動を展開するようになったといわれる。それならば、寧波出身者の場合はどうであらうか。寧波人も開港以後逸早く寧波港における外人商社の買辦へ進出したばかりではなく清稗類鈔四四「上海洋行之買辦」に「此爲上海洋商雇用買辦之始」として紹介するところによれば、「泊上海開埠。外人麀集。彼時中西隔絕。風氣錮蔽。洋商感於種種之不便。動受人欺。時則有寧波人穆炳元者。：頗得外人之信用。無論何人。接有大宗交易。必央穆爲之居間」という。いわゆる寧波人穆炳元なる者をもって、上海洋商の雇用した最初の買辦であるとすることができるかどうかは暫くおくとしても、外人の信用を得た穆炳元は、買辦として大口の輸出入貿易を仲介することにより、相當の資本を蓄積したであろうと思われる。抑々、彼が外人の信用を得ることができたのは、イギリスが定海縣を攻略した際（アヘン戦争の時）捕虜として上海へ連行され、その機會に英語を習得し、買辦としての第一の條件を具備するに至ったからである。かくして「穆又別收學徒。授以英語。教以與外人貿易之手續。及外人商業日繁。穆不能兼顧。乃使其學徒出任介紹」⁽¹³³⁾という。彼は買辦活動によって資本蓄積を押しすすめる傍ら、「學徒」を集めて英語及び外國貿易に關する知識を教授したわけである。彼によって養成・訓練されたこれらの「學徒」たちは、恐らく彼の一族・子弟か同郷の人々であった

に相違ない。蓋し寧波人は、廣州人がそうであつたと同様に、「聚族同居を爲す風があり、郷黨の觀念激烈で」あつて、「一人が一地で成功すれば、一家一門朋友乃至同郷のものを聞いて蜚集」する傾向があつたからである。従つて、輸入貿易の増大にともない、より多くの買辦を必要とするに至るや、買辦豫備軍としてのこれらの「學徒」たちが、穆炳元と同様に買辦活動へのり出したとすれば、上海における買辦の隊列の中で寧波出身者の比重が漸次増大するようになったのも、蓋し當然といふべきであらう。

他方、買辦の「活躍」舞臺も漸次着々と擴大された。即ち外國帝國主義の中國侵略の深化にともない、外人商社の數は年々増加の一途をたどつたが、不完全な統計によつても、十九世紀末には遂に九三三社に達し、その殆んどが上海へ集中した。かかる外人商社の急速な増加に比例して、買辦の隊列もまた急速に擴大したわけであるが、十九世紀末には一萬人以上の買辦が上海をはじめとする各通商港で活動してゐたといわれる。勿論その内には「無業の商賈」や「義學の生徒」出身のものも含まれるであらうが、買辦たらんとする者の「資格」はもはや外國語に通じているというこのみでは不十分となつた。蓋し外國商人は買辦の契約違反による「損害」を最少限にいとめるために、買辦志願者に對して金錢・有價證券及び不動産等の擔保物を要求し、また一定の資産を有する身元保證人を要求するようになったからである。他方、一定の資産を有する商人の側でも、「獲利の甚だ厚い」買辦の地位に就くことを資本蓄積の最良の手段とみなし、自から買辦の地位を獲得するか、或いは自己の一族から買辦を養成・訓練した。かかる傾向は上海市場への移動が最も顯著であつた寧波商人の買辦への進出を益々促進したのであらう。かくて、清末（二〇世紀初頭）になると、上海の「外國貿易場裏ニ於テ隱然一勢力ヲナス」ものは「洋行ノ買辦 (Compradore)」たる寧波商人であると報告されている。上海以外の重要な通商港においても、寧波商人の買辦活動は顯著であつた。例えば、既に指摘した漢口をはじめ、北方の貿易中心地たる天津においても、「寧波商賈ノミハ買辦トシテ」⁽¹⁴⁾「勢力ヲ有シ」⁽¹⁴⁾「外國商賈ト密接ノ關係」を保持していたので、「天津輸出貿易ノ大半ハ」彼等によつて取扱われたといわれる。

それならば、既に紹介した穆炳元の外に、買辦活動を通じて資本蓄積に狂奔した代表的な寧波商人として、いかなる人物を擧げることができるか。まず第一に、開港後早くも上海において錢莊及び絲行を經營する傍ら、怡和洋行の初期の買辦として「活躍」した「上海の紳商・楊坊」を擧げねばならない。⁽¹⁴²⁾ 楊坊は開港後の「上海に商いし、西人に習い」⁽¹⁴³⁾「よく夷語に通じた」ので「西人も之を親禮」するに至った寧波商人の一人である。楊坊については、既に外山氏の著名な論文をはじめ若干の關係論文があるので、その經歷や政治舞臺における活動は比較的よく知られている。ここではただ、彼が「通事奸商を以て家を起し、數百萬を」蓄積したとか、或いは「市僧を以て洋商に依附し」「十數年間に貲百萬を擁」したといわれる如く、買辦活動を通じて遂には上海紳商のリーダー格へのしあがったばかりでなく、政治的にも小刀會や太平天國革命の鎮壓に重要な役割を演じたことに注意しておきたい。第二に、清末から民國時代にかけて「活躍」した朱佩珍（葆三）を擧げよう。⁽¹³⁹⁾ 彼はアヘン戦争後の一八四七年に寧波武官の朱裕蘇の子として生まれ、十六歳の時上海へ渡り、商業取引上の訓練を経て後、一八七八年に新裕商行を開設し、その大株主になると同時に自から經營の任に當った。該商行は輸出入貿易を大規模に取扱ったというから、この頃から彼と外國商人との關係も緊密になったものと思われる。かくて清末（二〇世紀初頭）以來、平和洋行に招聘されてその買辦を兼ねるようになり、資本蓄積を押しすすめるためのより「有利」な條件を獲得した。この間に蓄積した資本をもつて、彼はフランス東方航業公司（中・佛合辦）及び上海絹絲公司（中・日合辦）などの外國帝國主義との合辦企業へ投資したばかりでなく、華安人壽保險公司・華興水火險公司・中國通商銀行・中興麵粉廠・大有榨油廠・吉邦橡膠公司・漢口自來水廠・廣州自來水廠・贛豐餅油廠など多數のいわゆる民族産業へも投資し、その董事長或いは董事の地位を占めた。従つて、民國初期に彼が「上海實業家の長老にして勢力あり」と評されたのも、決して誇張ではなかった。けれども、このことをもつて彼が民族資本家へ轉身したとみることはできないであらう。蓋し、彼の資本蓄積の基軸はやはり買辦活動であつたからである。第三に、屢々指摘した錢莊業の葉成忠（澄衷）の資本蓄積過程にも、買辦的色彩が濃厚であつた。⁽¹⁵⁾ 彼は十四歳の時同郷の倪某に連れられて上海に到り、

フランス租界内の雜貨店で修業をはじめた。「時に海禁大いに開かれ、帆船汽船が黃浦江に麇集」するようになると、彼は「黎明より暮に至るまで扁舟に掉し、江中を往來」して外國船に雜貨類を賣り込む仕事に従事した。「かくの如くすること三年、肆主頗る頼して」營業を顧なかつたので、彼は「卒に辭去」した。その後獨立して「一舟を駕し、仍ち浦濱の貿易に就きて苦を作す」こと久しくして、「益々外人に習い漸くその言語に通じ」るようになった。「外人その誠篤敦謹なるを見て、亦與に交易」することを欲したので、彼の「獲利は獨り厚」かつた。そこで同治壬戌（元年）、はじめて小肆を裏虹口に設置した。同年冬、店舗を外虹口に移轉し、郷里から母を呼び寄せて上海に永住することとした。當初は僅な資本で出發しながら、「よく人を擇んで」營業を補佐せしめたので、「數年の間に、して」營業規模は日に益々擴大したという。かくて、既に指摘した如く、彼の足跡は「通商の各埠に徧く」及んだのであるが、漢口においては長期にわたって順記號と稱する石油卸屋を經營し、アメリカ系美孚洋行の石油を一手に契約販賣したという。彼自身が買辦に「採用」されたかどうかは明らかでないとしても、彼のかかる經歷からすれば、買辦的活動こそ彼の資本蓄積のいま一つの重要な積桿であつたと考えてよいであらう。第四に、方氏一族の資本蓄積過程についても、葉氏とほぼ同様のことが指摘できる。⁽¹³⁾

ただ異なる點は、葉氏がいわば「立志傳的人物」であつたのに對して、方氏一族は既に開港前から上海へ進出し、若干の資産を築いていたということである。従つて方潤齋の開設した方振記號（後に方鎮記と改稱）は、開港後早くも外國貿易の方面へも進出を試みることができた。即ち該號は湖州地方の土絲や紹興府の綠茶を收買して、これを利百利洋行（原綴不詳）へ賣與し、その見返りとして「花色洋布」などの輸入商品を受取り、これを更に自己の所有する夾板船で漢口へ運び出して賣りさばいた。彼及び彼の弟の方性齋は若干英語に通じていたので利百利洋行との取引は頗る密接であつたという。この方面におけるかかる買辦的活動は、錢莊經營とともに、方氏一族の資本蓄積の重要な契機であつたと思われる。

なお、葉氏一族や方氏一族と共に錢莊業者として「著名」な李氏一族の中からは、李祖韓がアメリカ系洋行の買辦に「採用」され、⁽¹⁴⁾また上海の某錢莊で多年修業した寧波商人の許詩考（音譯）は、足頭の商賣を経た後、一八八四年上海の義記

洋行 (Holliday, Wise & Co.) に招聘されて買辦¹⁵⁵となった等々の例を擧げることが出来る外、主に漢口で活動した寧波出身の宋煒臣も「著名」な買辦商人の一人であつた。¹⁵⁶ 以上に擧げた寧波商人は、主に輸出入貿易を取扱う外人商社關係のいわゆる商社買辦¹⁵⁷の部類に屬する人々である。

ところで、十九世紀末以來、日本を含む資本主義諸國が帝國主義段階へ突入し、その中國侵略の重點が商品輸出から資本輸出へ移行するにともない、上海・香港などの各通商港における外國銀行の數も漸次増加の一途をたどつた。¹⁵⁸ かくて、商社買辦以上に重要な機能を附與され、資本蓄積の「魅力的」な手段と看做された銀行買辦¹⁵⁹の隊列も、漸次擴大せざるをえなかつた。けれども、銀行買辦たらんとする者の資格には商社買辦以上に重要な條件が附加された。即ち外國銀行が買辦を雇用する際には、「英語ニ通セルヤ否ヤ」は勿論のこと、「先づ其買辦力相當ノ資産家ナルヤ否ヤ若シ買辦自身力資産家ニアラザルモ其身元保證人カ相應ノ資産アリテ萬一ノ場合ニ銀行ニ對シテ其責ヲ負フニ足ルヤ否ヤ」を考慮した。¹⁶⁰ のみならずまた、「曾テ銀行業又ハ兩替業ニ經驗アリヤ否ヤ又其業務ニ於テ果シテ熟達シ又機敏ナルヤ否ヤ」をも銀行買辦たらんとするものの資格條件として考慮の對象とした。¹⁶¹ いわゆる銀行業又は兩替業の經驗者とは、中國の傳統的な舊式銀行業即ち錢莊・官銀號などの經營者を意味する。従つて、錢莊經營者をはじめとする舊式金融業者こそは、銀行買辦たる「資格」保持者、換言すれば、銀行買辦への最短距離に位置する買辦豫備軍であつたといわねばならない。¹⁶² かくして銀行買辦としての以上の二つの條件、即ち①相當の資産家かその一族・同郷縁故者であること、②金融業の經驗者であること、という條件を最も完全に具備しえたものは、寧波商人に外ならなかつた。蓋し、彼等は清末以來「上海市場ニ跋扈」し、「商雄」とか「商業の巨擘」と評されていたのみならず、上海錢莊業界においても壓倒的な勢力を築いていたからである。¹⁶³ かくて、寧波・紹興商人の中から銀行買辦が輩出したのも當然の勢いであつたと考えられる。

ここでは、寧波商人の中のもっとも典型的な銀行買辦を二人だけとり擧げて、その略歴を紹介しよう。まず第一に、「所謂寧波商人の鏘鏘たるもの」と評された虞和德（治卿）である。¹⁶⁴ 彼は同治六年（一八六三）、寧波府鎮海縣に生れた

が、十五歳の時同族の虞鵬九の紹介で上海へ渡り、奚潤如なるものの経営する瑞康顔料號で「商才」を發揮した。二十七八歳の時、魚麟洋行の招聘を受けてその買辦となり、資本蓄積の「有利」な條件を獲得した。該洋行で十年間活動した後、更に「有利」な條件を求めて、一八九九年に道勝銀行の買辦へ轉じた。更に翌年荷蘭銀行の買辦へ移り、以後三十餘年間該銀行の買辦として資本蓄積に狂奔した。その間の買辦活動によって蓄積した彼の資本は相當の額に達したであろう。なお、彼は長期にわたって買辦活動を展開する傍ら、四明銀行や揚清肥皂公司へ投資したり、寧紹汽船公司を設立して積極的に産業界へも進出を試みたのであるが、光緒三十二年（一九〇六）には蘇松太道の瑞澂と結託して江南地方の米を運出し、米價を暴騰させて巨利を博するなど、早くもその政治的手腕のほどをみせている。民國以後、彼は「浙江財閥」を代表して上海經濟界を牛耳ったばかりでなく、政治的にも五・四運動や四・一二クーデターの過程でその買辦的役割を如何なく發揮した⁽¹⁶⁷⁾ことにより、衆目をあつめるに至った。第二の代表的な銀行買辦は寧波府奉化縣出身の朱志堯（開甲）である。⁽¹⁶⁸⁾彼も一八六〇年前後に生れたものと思われるが、その經歷はあまり明らかではない。ただ、彼はキリスト教徒としてフランス租界天主堂街に「中世書室」を開設し、フランス語の書籍やキリスト教關係の書籍を販賣したというから、或いはフランス系の「義學」に在學したことがあるのかも知れない。その間に買辦としての訓練を受けたのであろうか、父の後を繼いでフランス系東方滙理銀行の買辦に登用されている。父子二代にわたる買辦活動を通じて、朱氏一家の蓄積した資本は相當の額に達したであろう。その資本は、十九世紀末から二〇世紀初頭にかけて設立された同昌榨油廠・求新機器輪船製造廠・同昌協記紗廠など多數の「民族」産業へも投資され、彼自身これらの企業の董事を兼任した。買辦資本家・朱志堯（開甲）は清末において既に「民族」資本家へ轉身しつつあったといえるかも知れないが、彼の資本の蓄積の主側面はやはり銀行買辦としての活動であった。

以上に紹介した寧波商人の代表的な商社買辦や銀行買辦は、清末の上海を主要な舞臺として、同郷的紐帶による連携を保持しつつ、漸次上海經濟界に有力な勢力を形成していった。民國以後になると、寧波商人の買辦への進出は更に顯著と

なり、既に指摘した虞和德（洽卿）・朱志堯（開甲）・朱佩珍（葆三）などをはじめ、臺灣銀行買辦の葉子衡（錢莊經營者葉成忠の第四子）・大英銀行買辦の徐慶雲（恒祥等三錢莊の株主）・上海開灤礦務總局買辦の劉鴻生⁽¹⁷⁾・三井銀行買辦の朱子奎（朱佩珍の子）⁽¹⁷⁾・アメリカ系茂生洋行買辦の袁履登などを中心とする寧波出身者が、買辦ブルジョアジー内部で壓倒的な勢力を占め、錢莊及び銀行などの金融部門で資本蓄積を推進した寧波商人とともに、「浙江財閥」の重要な一翼を擔うことになる。

五 寧波幫と上海商務總會

開港とともに、とりわけ太平天國革命の挫折を契機として、「所謂買辦都市への飛躍的發展の第一步を踏み出」した上海は、中國各地からの移住者の一大集結地となり、急速な人口増加の現象を招來した。⁽¹⁷⁾なかでも、廣州・寧波人の上海への移住が顯著な現象となったことは、既に繰り返し述べた。清末（二〇世紀初頭）になると、「上海市場ニ於テ最モ著名ナルモノハ寧波幫ニシテ之ニ亞グニ廣東幫トス。然レドモ彼等兩幫ノ間ニハ其勢力ノ差多大ニシテ廣東幫ハ寧波幫ニ及バザルコト遠シ。今當港ニ於ケル各幫勢力ノ比例ヲ見ルニ寧波幫ハ七割ヲ占メ廣東幫ハ一割ヲ占メ其他各幫ハ二割ヲ占ム」と報告されているように、「寧波幫」は上海市場において壓倒的な勢力を占めるに至った。

ここに言う「寧波幫」とは、勿論「上海ニ於ケル寧波商人（の集團）ヲ意味」し、⁽¹⁷⁾「廣東幫」とは廣東商人の集團を意味する。つまり、「幫」とは「同郷商人の團體」⁽¹⁸⁾、別の言葉で言えば「同郷の誼に因り組織したギルド」⁽¹⁹⁾に外ならないわけであるが、寧波幫が上海市場において他の同郷商人の諸團體を壓倒し殆んど獨占的な勢力を築くに至った要因は、いかなる點に求められるか。清末（二〇世紀初期）の調査報告書によれば、「寧波商賈ハ支那商賈中ノ錚々タル者ニシテ：商機ニ敏捷ナル他ニ卓越スルモノアリ。是レ即チ寧波商人ガ各市場ニ飛揚跋扈シ上海ノ如キ有力商賈ノ大半ハ寧波商賈ニシテ且ツ其他各要市ニモ所謂寧波幫ナル者ヲ組織シ其勢力ノ侮ル可カラザルモノアル所以ナリ」⁽²⁰⁾と指摘している。いわゆる「商

機ニ敏捷ナル他ニ卓越スルモノアリ」とは、既に明らかにしたように、寧波商人が買辦活動及び錢莊經營などの分野で外國帝國主義に寄生・從屬しながら、資本蓄積の「有利」な機會を巧みに掴みえたことを意味する。寧波幫が上海市場の「七割」を獨占しえた第一の要因は、まさにこの點にあつた。加えてまた、前掲の調査報告書が「殊ニ彼等寧波商賈ハ團結聯合ニ強固ニシテ他省商賈ヲ排斥シテ自幫ノ勢力擴張ニ孜々務メツ、」あると指摘しているように、寧波商人の同郷的紐帶にもとづく「團結」がとりわけ強固であつたことも、彼等の勢力擴張の重要な要因であつたと思われる。かかる同郷意識を紐帶として團結した寧波幫の上海における組織的中心が、いわゆる四明公所であり、寧波會館であつた。⁽¹⁸³⁾

ところで、一般に公所・會館の指導者（董事）は、「富豪ニシテ同郷人間ニ人望ヲ有スルモノ多ク」「有力者ニシテ官衙ニ交渉シ或ハ他郷人ト折衝シテ郷人ノ利益ヲ圖」りうる人物とされたわけであるが、それならば四明公所の指導者はいかなる人々であつたか。四明公所の設立は開港に先立つこと四八年、即ち嘉慶二年のことであるが、道光年間には、かの「著名」な方氏一族が該公所を左右する勢力をもち、これを背景に「上海經濟界で抜くべからざる基礎」を築いた。⁽¹⁸⁴⁾太平天國革命の時期には、「上海の紳商場坊」も「虹口において四明公所及び義園を創し、甬人（寧波人）の兵を避けて滬に來たる者を周恤」したので、該公所における影響力は巨大であつた。十九世紀末には、「商雄」と評された葉成忠（澄衷）をはじめ、沈敦和・葛繩孝などが該公所の指導部を構成した。⁽¹⁸⁷⁾清末（二〇世紀初期）には、嚴筱舫（信厚）・葛藩甫・方式如・周湘雲の四名が該公所の董事に名を連ねている外、虞和德（洽卿）・朱佩珍（葆三）などの買辦も有力な指導者であつた。⁽¹⁸⁸⁾要するに、四明公所の指導者は當代の「著名」な寧波商人に外ならなかつたわけであるが、彼等は上海市場において壓倒的な勢力を占める寧波幫の組織的中心たる四明公所を背景として、對外的にも重要な影響力を行使することができたのである。⁽¹⁸⁹⁾

しかしながら、四明公所といえども、同郷的紐帶を基礎にしていた限り、その影響力の及ぶ範圍は限られざるをえない。即ち、十九世紀後半以降、「洋務運動」を背景に成長しつつあつた上海の「ブルジョアジー」全體を結集するために

は、もはやかかるギルド的組織によつては不可能であつた。勿論、上海の「ブルジョアジー」といっても、寧波商人をはじめとする浙江・江蘇地方の舊式な地縁的商人集團の集合體に過ぎなかつたけれども、帝國主義の急速な中國侵略によつて招來された「近代化」現象に對應して、彼等も自からの階級的組織をもつ必要性を感じはじめていた。⁽¹⁹¹⁾ 他方、盛宣懷のような洋務派官僚たちも、「産業振興」のための資本を官金に依存するだけでは足りず、富商を通じて上海商人團と結びつる必要に迫られていた。ここにおいて、盛宣懷などの「官僚の建言にかかる天降りの官憲補助機關」に過ぎなかつたといえ、「初めて朝廷の公認を得た商人團體」として、「上海商業會議公所」が成立した。⁽¹⁹²⁾ 光緒二十七年（一九〇一）のことである。この時、該公所の設立に商人の側で中心的な役割を演じたものこそは、寧波幫の指導者たちに外ならなかつた。従つて、該公所設立と同時に、嚴信厚は總理に、周普鑑と毛祖模は副總理に就任し、施則敬（絲業公所の董事）などの同業・同郷團體の董事が會員に名を連ねた。⁽¹⁹³⁾ このことは、該公所の組織構成が四明公所をはじめとする「商人ギルドの聯合體」であつて、「それ自體が上級ギルドたる作用を営む」極めてギルド的性格を依然として内包してゐたことを示している。とはいへ、「各幫の間に連絡をとること」を目的とし、「諸外國の商業會議所の行える職分」をも遂行しようとした點に、傳統的な同郷・同業團體の枠から一步踏み出した上海「ブルジョアジー」の階級的組織としての意義を認めることができる。

該公所の設立に見られるような寧波商人をはじめとする民間商人集團の動きと並行しつつ、清朝政權も一連の「産業振興」政策を推進した。その一環として、光緒二十九年（一九〇三）、商會簡明章程二十六條が制定された。⁽¹⁹⁴⁾ 該章程の趣旨は「實業營業ノ異同ヲ論セス一地方ニ於ケル商人ヲ舉ケテ之ヲ提撕指導スルノ機關ヲ設ケ商人互ニ相傾軋スルノ陋習ヲ除クト俱ニ又之ニ依リテ官府ト商人トヲ連絡シテ上下隔關ノ弊ヲ去ルコト」にあつた。⁽¹⁹⁵⁾ かくて、該章程にもとづき、まず上海・天津・煙台・安慶・廈門等において、商會の設立をみるに至つた。⁽¹⁹⁶⁾ もつとも、上海においては、「勸辦京城商會。并推廣上海商會。將原設商業公所。改爲商務總會」という商部の上奏にもとづき、原設の上海商業會議公所をもつて「上海

「商務總會」と改稱したに過ぎない。光緒三十年（一九〇四）のことである。成立の経過から見て、該商務總會もまた傳統的なギルド的結合の各種の形態を内包していたことは明らかであろう。とはいえ、清朝政權と上海商人團の連絡機關としての性格と、「より近代的な全一組織」⁽²⁰⁰⁾としての任務を帯びて誕生した該商務總會は、上海「ブルジョアジー」の階級的成長を示す一つの里程碑を意味するものであった。

それならば、該商務總會の内部で指導的役割を演じたのはいかなる人々であったか。勿論成立の経過からみても明らかに、該商務總會の指導部も、上海市場の「七割」を占める寧波幫の指導者をはじめ、その他の浙江諸幫の「著名」な商人たちによって牛耳られた。いま、試みに一九一一年十月の上海商務總會々員名簿⁽²⁰¹⁾から寧波幫の指導的人物を抽出すれば、錢莊經營者の林蓮蓀・李氏一族の李徵五・荷蘭銀行買辦の虞洽卿・平和洋行買辦の朱佩珍・東方滙理銀行買辦の朱志堯・電報局總辦の周普鑑などが挙げられる。その内、朱佩珍は該商務總會の總理に、周普鑑は「商務總會創立に盡力して同會坐辦」⁽²⁰³⁾に任ぜられた外、「中國實業家中其名聲故盛宣懷・張謇兩氏に亞ぐ」と評された沈敦和も該商務總會の議董を歴任した⁽²⁰³⁾という。なお、彼等に代表される寧波幫以外の江浙諸幫からも、日清汽船買辦の王一亭・滙豐銀行買辦の席立功などが該商務總會の指導部へ加わった⁽²⁰⁴⁾。かくて、該商務總會の内部には、漸次寧波商人を中核とする浙江省出身者の地縁的集團——「浙江財閥」が形成されはじめるのである。

錢莊經營と買辦活動を通じて資本蓄積に狂奔しつつ、四明公所へ結集した寧波商人は、いまや上海商務總會の中樞部へ進出し、依然として強固な同郷的紐帶を保持しつつも、新たなより廣範圍の地縁的集團——「浙江財閥」を成立せしめ、これを背景に上海經濟界における發言權を強化した。のみならずまた、彼等は政治舞臺においても、或いは諮議局員として⁽²⁰⁵⁾、或いは上海城自治公所の指導者として、その政治的影響力をも漸次擴大していった。

十九世紀後半以降、中國の半封建・半植民地化への轉落に反比例して擡頭・「發展」してきた寧波商人は、既にその資本蓄積の過程において外國帝國主義への深い依存性・寄生性を刻印されざるをえなかったが、彼等を中核として形成された「浙江財閥」、及びその基盤たる上海商務總會も、また當然のことながら買辦的色彩を濃厚に身につけつつ誕生した。たとえ、彼等の中に「民族」産業への投資を通じて民族資本家へ轉身した人々がいたようにみえたとしても、その買辦資本家としての本質は覆いかくせるものではなかった。⁽²⁰⁷⁾ このことは、彼等が多事多端な清末の政治舞臺においていかなる動きを示したかを検討することにより明らかとなる。そこで最後に、上海商務總會成立の翌年、即ち光緒三十一年（一九〇五）に展開された有名な對米ボイコット運動における寧波商人の動向をとりあげて結びにかえたい。

「中國近代民族運動の萌芽」と評價されている對米ボイコット運動⁽²⁰⁸⁾は、アメリカの中國人移民排斥法案が一九〇四年改訂期をむかえ、清朝の無力によって更に改惡・嚴格化されようとしていたことを直接の契機として展開された。上海商務總會は他の諸團體と共にアメリカ總領事に抗議を提出し、アメリカが排斥法案を改善しなければ一九〇五年五月末日からアメリカ商品を排斥すると通告した。然るにその期日を六月十八日に延ばさざるをえなくなり、その前日十七日の會議で漸く十八日以降排斥に踏み切ることを決議した。⁽²⁰⁹⁾ この會議には、各業各同郷の商人・學生多數の結集をみたが、席上馬相伯が雄辯を振るって、「不用美貨一事。我國信言已二月。而新舊美使尙謂。中國素無團結力。抵制之說無足懼者。試問在坐諸君。肯受斯言否。…有人以爲不用美貨有大不便於我國者。噫語耳。是故我人如能協力實行。則日本尙可以勝俄。安知我國不必挽回美約」⁽²¹⁰⁾と呼びかけ、對米ボイコットへの奮起を促している。かくて對米ボイコット運動は「學界に濫觴し、報界に煽動せられ、商界工界に激流し」、⁽²¹¹⁾上海においては「最大限の效果」を發揮したといわれる。⁽²¹²⁾

しかしながら、ここで注意しなければならないことは、アメリカ大使が「抵制の説懼るに足る無し」と嘯いてみせた如く、對米ボイコット運動は短期間で終りを告げ、一九〇五年のうちに下火となったという事實である。「その主な原因は、長期先物契約でアメリカの棉花を買付けてゐた支那人貿易商達が、かれらの手持棉花を處分することが出来なくな

り、その結果煽動に對して冷淡になったことにある²¹³」といわれる。確かに、運動に参加した上海商務總會の内部には、「美貨（アメリカ商品）を用いざればわが國に大いに便ならず」と主張する有力な勢力が存在した。即ち棉花商をはじめ石油・製粉・機械・雜貨等アメリカ商品を取扱う貿易業者である。彼等は大勢に迫られて、一應ボイコットに同調はしたものの、絶えず裏面で破壊工作を續けた²¹⁴。例えば、彼等は輸入済みのアメリカ商品に、上海商務總會の許可證を貼附して流通させるべく畫策し、これに成功したのである。

それならば、かかる貿易業者とはいかなる人々であつたのか。勿論、既に繰り返し指摘したように、上海市場の「七割」を獨占する寧波商人に外ならなかつた。その代表的な人物は、絲業公所董事の施則敬（子英）である²¹⁵。彼はアメリカ貿易に依存する買辦の大ブルジョアの先頭に立つて、表面的にはボイコットに同調しながら、蔭でそれを破壊しようと暗躍した寧波商人の代表的徒輩であつた。しかも、彼の背後には同郷的紐帶によつて結束する寧波幫があり、寧波幫は上海商務總會を牛耳つていたのであるから、該商務總會が對米ボイコット運動に「もつとも慎重であつた」²¹⁶ばかりでなく、破壊的役割すら演じたのは、蓋し當然といふべきであらう。アメリカ大使は該商務總會のかかる買辦的性格を見通していたが故に、「抵制の説懼るるに足る無し」と豪語しえたのである。

かくて、寧波幫を中核として形成された「浙江財閥」、及びその基盤たる上海商務總會の媚態的・反民族的姿勢の一端は、早くもここに顯在化しつつあつたといふことができるであらう。その後の一連の政治的諸事件において、かかる傾向は益々顯在化せざるをえなかつた。例えば、辛亥革命の過程で、革命の隊列へまぎれ込み滬軍都督府の要職を竊取した寧波商人の虞洽卿・朱佩珍などは、彼等の牛耳る上海商務總會の名義を利用して、公然と滙豐銀行の取附騒ぎを救済し、その買辦的役割を露呈した²¹⁷。やがて、五・四運動及び四・一二クーデターの過程において、彼等の買辦資本家としての本質は萬人の前に徹底的に暴露されるのである。へ一九六七・四・二八稿了

〔付記〕本稿は昭和四〇年度の修士論文に若干の補訂を加えたものである。なお本稿作成に當つて佐伯教授から貴重な

示唆を頂いた。付記して謝意を表する。

註

(123) 根岸…『前掲書』Ⅱ。橘…前掲書。波多野…前掲書。その他参照。

(124) 根岸…『前掲書』Ⅱ。なお、買辦制度の成立を規定した諸條件は、①中國と外國との言語の懸隔、②風俗・慣習等の相違、③中國における貨幣制度と度量衡制度の不統一、④經濟發展水準の相違等々であるといわれる（『全書』第二輯三三〇—三三一頁。その他参照）。確かに、公行制度廢止後の對中國貿易の初期の段階にあつては、以上の諸條件、とりわけ言語の不通という不利な條件は、外國商人にとつて買辦の存在を必要不可欠なものとしたであらう。けれども、買辦制度がその内容の變化・發展をとげつつも人民中國の成立直前まで存続したという事實は、買辦の經濟的及び政治的機能が外國帝國主義の中國侵略にとつて絕對不可欠の要素であつたといふことによつてしか説明されえない。根岸氏が「買辦使用價值」の一つとして、中・外の「緩衝地帶」としての買辦の役割を指摘しておられるのも（『前掲書』Ⅱ）、右のことを「學問的」に言い換えたに過ぎない。買辦制度は外國帝國主義の中國侵略の過程で生み出された半植民地中國の一つの象徴であつたといえるであらう。

(125) 黃逸峯…前掲論文。根岸…『前掲書』Ⅱ。波多野…前掲書。その他参照。

(126) 『清稗類鈔』四四「上海洋行之買辦」。

(127) 外山軍治「上海の紳商楊坊」（『東洋史研究』通卷第九卷四號所收）。

(128) 小野川秀美「清末洋務派の運動」（『東洋史研究』通卷第十卷第六號所收）参照。

(129) 馮桂芬「設立上海同文館議」（『校邠廬抗議』卷下所收）。

(130) 馮桂芬…前掲書。

(131) 馮桂芬…前掲書。

(132) 波多野…前掲書一五〇頁以下参照。

(133) 『年譜』六五頁に寧波における買辦の惡質な活動が記述されているが、それによると、「通司（即ち買辦）盧天錫、亦寧波人、遇事生風」とある。

(134) 『清稗類鈔』四四「上海洋行之買辦」。

(135) 『清稗類鈔』四四「上海洋行之買辦」。

(136) 根岸…『前掲書』Ⅰ一三一頁。なお、開港以後、とりわけ太平天國革命の挫折以後、寧波人の上海への移住が顯著な現象となつたことの背後には、かかる傾向が存在したことをも指摘せねばならないであらう。

(137) 黃逸峯…前掲論文参照。

(138) 黃逸峯…前掲論文参照。

(139) 根岸…『前掲書』Ⅱ参照。

(140) 『全書』第七輯一六〇頁。

- (141) 『全書』第七輯一八三頁。
- (142) 外山…前掲論文。黃逸峯…前掲論文參照。
- (143) 『光緒鄞縣志』四四楊坊傳。
- (144) 『同治上海縣志』卷二十三。
- (145) 『光緒鄞縣志』四四楊坊傳。
- (146) 『同治上海縣志』卷二十三游寓傳に、楊坊は「浙之鄞縣人」であるというから、彼が寧波商人の一人であることは疑いない。
- (147) 外山…前掲論文。小野信爾「李鴻章の登場—その政治的基盤の確立をめぐる—」(『東洋史研究』第十六卷第二號所收)。
- (148) 「致左李高中丞」(『李文忠公朋僚函稿』一所収)。
- (149) 請將已革道勒追京米捐款再行捐販米片」(『左文襄公全集』格端奏稿初編九)。
- (150) 『官紳錄』。『全書』第二輯三八六頁。『工業史資料』第二輯下冊九六五頁參照。
- (151) 『清神類鈔』四四。『清史稿』列傳二八五。『上海縣續志』卷二十一。その他參照。
- (152) 黃逸峯…前掲論文參照。
- (153) 『錢莊史料』七三〇頁。根岸…『前掲書』I參照。
- (154) 『錢莊史料』七三七頁。
- (155) 張國輝…前掲論文參照。
- (156) 『全書』第拾一輯一三三—一三四頁。波多野…前掲書二四八頁參照。
- (157) 商社買辦は貿易買辦或いは社内買辦ともいわれる(根岸…『前掲書』II。『全書』第二輯三七頁以下參照)。

- (158) レーニン『帝國主義論』參照。
- (159) 例えば、早くも一八四〇年代には、麗如銀行(Oriental Banking Co.)が、五〇年代には有利銀行(Mercantile Bank of India, London and China)・麥加利銀行(Chartered Bank of India, Australia and China)及び中國名不詳の「Agra and Uniea Service Bank」が香港・上海に支店を開設した。一八六〇年代には、本店を香港におく滙豐銀行(Hongkong and Shanghai Banking Co.)がその支店を上海・漢口に開設した。以上のイギリス系銀行の外、十九世紀末から二十世紀にかけて、德華銀行(Deutsch-Asiatische Bank)・露清道勝銀行(Russo-Chinese Bank)・東方滙理銀行(Banque de L'Indo-Chine)・花旗銀行(National City Bank)・荷蘭銀行(Nederlandsche Handels-Maatschappij)・華比銀行(Banque Belge pour L'Etranger Extreme Orient)・寶信銀行(Guarant Trust Co. of New-York)・義豐銀行(Society C. I. Bancaria de Shanghai)及び橫濱正金銀行などの支店が上海・香港に陸續として開設され、活動を開始した(『全書』第二輯三四二頁以下。その他參照)。
- (160) 銀行買辦の報酬は、商社買辦と同じく俸給と手数料であるが爲替取組・金銀の買賣・預金・貸付などの業務上で銀行と其の取引相手の双方から受取る手数料こそ、銀行買辦の資本蓄積の源泉であった。この種の手數料は小銀行でも年額二萬兩を下らず、大銀行に至っては十數萬兩に達したといわれる(根岸…前掲書II參照)。

- (161) 『全書』第二輯三五〇—三五二頁。
 (162) 『全書』第二輯三五二頁。
 (163) すでに第三章で明らかにしたように、錢莊は洋銀買賣や莊票發行という機能を通じて、また最大の資金源たる折票を通じて、外國銀行とは密接不可分の關係にあり、錢莊經營自体が買辦活動に準ずるものであったといえる。
 (164) 第二章及び第三章参照。
 (165) 『官紳錄』。根岸…『前掲書』II及び『中國社會に於ける指導層—耆老紳士の研究』参照。
 (166) 『農業史資料』第一輯八九〇—八九二頁。
 (167) 上海人民出版社『五四運動在上海史料選輯』二三九頁以下参照。鄧中夏『中國職工運動簡史』一九四頁以下参照。根岸『前掲書』II参照。
 (168) 『工業史資料』第二輯下冊八七八—八八九頁及び九六一頁。『全書』第二輯三八四頁。
 (169) 『錢莊史料』七四三頁。
 (170) 吳承禧…前掲書二四五頁以下参照。
 (171) 陳眞、姚洛合編『中國近代工業史資料』第一輯三二六頁及び四〇二頁以下参照。
 (172) 陳眞、姚洛合編…前掲書三二六頁。
 (173) 根岸…『中國社會に於ける指導層』参照。
 (174) 根岸氏は民國時代の上海における著名な買辦九〇名とその出身地を挙げておられるが、それによると、浙江出身者は最も多く四十三名を占め、江蘇出身者は三十一名、廣東出身者は七名、安徽出身者は五名、江西出身者は一名、不明のもの

- 三名となっている。ところで浙江出身者四十三名の内、寧波出身者が實に二十八名（根岸氏は二十四名としておられるが、清代寧波府屬の各縣出身者を合わせれば二十八名となる）を占め、紹興出身者は五名である（根岸…『前掲書』II二三四—二四〇頁参照）。買辦階級内部における寧波出身者の比重がいかに大であったかを窺知しうる。かかる現象は清末以來の傾向であったといえよう。
 (175) 山上…前掲書五〇頁。小竹文夫「上海の沿革」（『支那研究』第十八號所収）。
 (176) 『全書』第七輯一五九頁。
 (177) 『全書』第二輯五四三頁。
 (178) 『清國行政法』第二卷五〇九頁。
 (179) 根岸…『前掲書』I一三五頁。
 (180) 『全書』第七輯二〇二—二〇三頁。
 (181) 『全書』第七輯二〇三頁。
 (182) 『清稗類鈔』三四譏風に「滬多蘇女。…團體固結。彼此援引。在滬人數之多。可與廣州・寧波之商人相提而並論」とあるように、上海における「蘇女」の團結が固いこと、その人數が多いことを強調するために、廣州・寧波商人が例として引き合いに出されていることから、同郷意識を紐帶とする寧波商人の團結の「固さ」を窺知しうる。
 (183) 上海における寧波商人は商業活動のあらゆる部門に進出したのであるから、「寧波幫」はその内部に各種の營業種目を異にする會員を包括していたわけであるが、各會員は自己の營業種目毎に更に各種の「同業者ノ小團體」即ち「業幫」—

錢莊帮・貿易帮・棉花帮・雜貨帮・煤炭帮・藥材帮・魚業帮及び勞働者等——を組織した。しかも、各業者は同業者の共通の經濟的利益を維持・擁護するために、他郷出身の同業者と協同して、四明公所や寧波會館とは別に、各々の同業者組織として、會館・公所を設立した。例えば、錢莊帮は他郷出身の錢莊業者——紹興商人など——とともに、上海錢業公所を組織し、その指導者（董事）として、趙棧齋・張寶楚・莊爾薌・馮澤夫・袁聯清・李墨君・林連孫などが、錢莊業界において重要な役割を演じた。他の同業者團體においても、寧波商人が指導的位置を占めたことは言うまでもない。けれども、一般に中國商人に對して「最も強くはたらき掛ける團結要素は、同業關係から生ずる共通利害よりも寧ろ同郷意識から發生する共通感情及び之に伴ふところの共通利害」であり、換言すれば、中國商人の「團結意識の内容は職業主義的であるよりも寧ろ地方主義的」であつた。寧波商人の場合とはくにその傾向が強かつたから、同郷的紐帶を基礎とする四明公所や寧波會館こそ、彼等の團結の最大の據點となつたのである。しかも四明公所の内部には、商人の外に寧波出身の勞働者も含まれていたことに注意せねばならない。

『全書』第二輯。『清國行政法』第二卷。大谷孝太郎「上海における同郷團體及び同業團體」——『支那研究』第十八號所収。根岸『前掲書』I。橘・前掲書。『錢莊史料』七二五頁。

『年譜』二〇一—二〇三頁。その他参照。

(184) 『全書』第二輯五六五頁。

(185) 根岸・『前掲書』I 参照。

(186) 『同治上海縣志』卷二十三。

(187) 根岸・『前掲書』I 参照。

(188) 『全書』第二輯五六五頁。なお、根岸氏・『前掲書』I 四一頁によれば、民國四年の四明公所の董事は、朱佩珍・周普鑑・沈敦和・虞洽卿・嚴義彬・方舜年・方積鈺・周鴻孫・葛恩元の九名であつた。

(189) 四明公所に結集する寧波帮の團結が如何なく發揮された典型的な例としては、フランス租界の擴張をめぐつて、同治十三年（一八七四）及び光緒二十四年（一八九八）の二回にわたつて起つたフランス官憲と寧波帮の衝突事件をあげることができる。フランス官憲は租界内の四明公所に所屬する丙舍を武力で取除こうとしたが、これを阻止する寧波人との間に衝突が起り、第一回目の衝突事件の際には四明公所の董事であつた方繼善・嚴信厚等がフランス領事と商議を重ねた結果、外交問題へ持ち込まれ、光緒四年（一八七八）に一應の妥協が成立した。然るに光緒二十四年に至つて、再び衝突が起り、フランス官憲の武力彈壓に憤慨した寧波人は、ストライキやサボタージュでもつて「一時上海貿易を中止せしむる勢い」を生じさせたという。もつとも、この時の對佛レジスタンスを指導したのは勞働者出身の沈洪賽に率いられる寧波人の「下流階級」であつて、從來の四明公所の董事たち（方繼善・嚴信厚・葉成忠など）は、「徒らに狼狽するのみで策の出る所を知らなかつた」。このことは、たとえ同郷的な狭い枠内の利益であつても、それを擁護するためには「民衆の力に頼る外に途」はなく、寧波帮の指導者たちといえども、

かかる「下流階級」の寧波人の爆發するエネルギーを押しとどめるには全く無力であつたことを示している（H・Bモース著・増井經夫譯『支那ギルド論』六四―六七頁。根岸…『前掲書』I参照）。

- (190) 中村義「清末政治と官僚資本」（『中國近代化の社會構造』所収）参照。

- (191) 中村…前掲論文参照。

- (192) 中村…前掲論文。橋…前掲書。

- (193) 橋…前掲書。根岸『上海のギルド』参照。

- (194) 大谷…前掲論文。橋…前掲書参照。

- (195) 橋…前掲書参照。

- (196) 『光緒東華錄』卷一八四。『清國行政法』第二卷五二三頁。

- (197) 『清國行政法』第二卷五二三頁。

- (198) 『清國行政法』第二卷五二六頁。

- (199) 『德宗實錄』光緒三年五月庚寅。

- (200) 小島淑男「辛亥革命における上海獨立と商紳層」（『中國近代化の社會構造』所収）。

- (201) 「順天時報」宣統三年九月六日。小島…前掲論文参照。

- (202) 『官紳報』

- (203) 『官紳錄』

- (204) 小島…前掲論文参照。

- (205) 一九〇九年に上海縣から選出された諮議局員の中には、朱志堯・朱佩珍・周普鑑及び李厚裕（雲書）が名を列ねている（小島…前掲論文参照）。

- (206) 一九一〇年の上海城自治公所の名譽董事には朱志堯が、董

事の一人に李厚裕が名を列ねている（小島…前掲論文）。

- (207) 民族資本家といい、買辦資本家というも、畢竟それはすぐれて政治的な概念であり、従つて、個々の資本家についてみる場合、彼の政治的立場を重視しなければならない。單に「民族」企業へ投資しているからと言って、民族資本家であるとか、民族資本家へ轉身したというのは當を得ないであらう。

- (208) 菊池貴晴『中國民族運動の基本構造』参照。

- (209) 波多野…前掲書参照。

- (210) 「順天時報」同年六月二十五日。

- (211) 「順天時報」同年七月二十三日。

- (212) ポット…前掲書二四〇頁。菊池…前掲書参照。

- (213) ポット…前掲書二四〇頁。

- (214) 和作輯「一九〇五年反美愛國運動」（『近代史資料』第一期一九五六年）。菊池…前掲書参照。

- (215) 菊池…前掲書参照。橋…前掲書参照。根岸…『中國社會における指導層』参照。

- (216) 波多野…前掲書。

- (217) 黃逸峯…前掲論文参照。小島…前掲論文参照。『上海商團小史』参照。